

【氏名】 宮澤直美

【所属大学院】 (助成決定時) 津田塾大学大学院 文学研究科 博士課程 及び

State University of New York, Buffalo, English Department, Ph.D. Candidate

【研究題目】

19 世紀アメリカの探偵小説と都市化の問題：

エドガー・アラン・ポーと実在の探偵が書いた探偵小説

【研究の目的】

本研究の目的は、黎明期のアメリカ探偵小説界に偉大な痕跡を残したエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) の探偵小説と、これまでその実態があまり知られてこなかった実在の探偵によって書かれた探偵小説を発掘することである。

ポーの探偵小説が書かれた 1840 年代、急増する犯罪とともに、職業としての探偵が登場してくる。彼らが引退後に自らの実体験に基づいて、探偵物語を書いていた事実に着目し、これまでの文学キャンオンから外され、研究されてこなかった物語群の発掘を目指す。これは、ポーの探偵小説を歴史的な文脈からより深く理解することに寄与するだけでなく、アメリカ探偵小説史上の空白を埋め、ポー以降の探偵小説や都市文学の流れを再認識する上で、重要な意義をもつものと考えられる。

【研究の内容・方法】

ポーの探偵小説のほかに、ニューヨーク市警察の刑事・探偵であったジョージ・マックウオーターズ (George S. McWatters) やトーマス・バーンズ (Thomas Byrnes) が引退後に書いた回想録を扱った。まず、ジョージ・マックウオーターズとトーマス・バーンズに関する伝記的事実を探索、調査した。その際に、探偵の活躍が犯罪者社会との密接な信頼関係と情報提供によって支えられていた相互補完的な関係に留意した。探偵を取り巻く人間関係や、社会活動とのかかわり、政治的立場を明らかにし、活動の実態を包括的に捉えることを第一の課題とした。次に、彼らの文筆活動が、ポーを機軸とした 19 世紀中葉の探偵小説および都市小説の系譜のなかで、どのように位置づけられるのか検討した。ポーの探偵小説「マリー・ロジェの謎」(“The Mystery of Marie Roget; A Sequel to “The Murders in the Rue Morgue” 1850) は、現実に起きた未解決の殺人事件を、新聞記事に報じられた情報をもとに作品の中で解決しようとした物語である。現実の殺人事件を題材にしたポーと、探偵の立場から過去にかかわった実際の事件を物語化した探偵。両者は現実と虚構の境界をどのように位置づけていたのか、比較考察した。最後に、このような探偵小説や彼らの活躍が、回想録や新聞・雑誌を通じて、多くの読者を得ていたその理由を歴史的な文脈の中で捉えた。

身元の分からない他者に接する不安な都市生活の中で、犯人のアイデンティティーを探りあて、

事件の謎を解く探偵物語は、人々の不安を解消する媒体として歓迎されていた。変革の時代が招いた新たな不安、そして探偵の書いた準探偵小説とポーの探偵小説が担った社会的役割についてまとめた。

研究方法としては、ニューヨーク警察博物館、ニューヨーク公共図書館(New York Public Library)、公文書間(Public Record Office)で一次資料の探索を進めた。

【結論・考察】

本研究では、ニューヨーク警察博物館やニューヨーク公共図書館のコレクション、新聞雑誌の実話記事など、現地での資料調査、研究を通じて、探偵小説の祖として知られるポーの周辺に、実在の探偵や刑事の実体験に基づいて描かれた、『準探偵小説』とよべるジャンルが存在したことを明らかにした。ジョージ・マックウォーターズやトーマス・バーンズら実在の探偵の残した回想録が、探偵小説と同様に人気を博した背景を文化史的に考察し、都市化とそれに伴う犯罪の増加、他者への不安を背景にして、事件を読むという行為自体が読者を惹きつけていた時代精神に迫った。

今後の課題のひとつとして、19世紀中葉を扱った本研究の成果を踏まえ、アメリカの探偵小説が19世紀後半にかけてどのような変遷を辿っていったのか、検討することが挙げられる。